

私を堕とせるのはただ一人？いや、こ  
こからが恋人だし！

【第7話】

みなぎし　すい

## 【人物一覧表】

柊千咲：女子高生

白石彩夏：社長令嬢

神谷里見：女子高生

杉園愛梨：モデル

飯田早苗：女優

柏木奈子：千咲の叔母

前田香（30）：白石インテリジエン

ス社員

女子生徒A

女子生徒B

司会者：司会の女

○女子高・3の3教室（朝）

扉が開く。柊千咲、教室に入る。

千咲の視線が、白石彩夏、飯田早苗、  
神谷里見、杉園愛梨のほうに向く。

千咲「え……」

千咲、髪をおろした愛梨を見る。

千咲「愛梨ちゃん、なにそれ！ めっちゃか  
わいいんだけど……！」

千咲、感激の表情になり、口を手で覆  
う。

愛梨「あ、あのね。イメチエンしてみたの」

千咲「なんで」

愛梨「千咲ちゃんに、褒められたから」

○（回想）杉園宅・愛梨の部屋（夕方）

千咲「これとか、清楚で似合うと思う！ お、  
おろした髪型とか？」

千咲、服を1着手に取る。

（回想終わり）

○女子高・3の3教室（朝）

千咲「あーね。にしても、マジかわいいっ」

愛梨「えへへ、えへ。千咲ちゃんに褒められ

てうれしい」

愛梨、嬉しそうに笑う。

里見、自分の胸に手を当てる。

○同

生徒たちが昼食をとっている。

早苗、女子生徒2人に勉強を教えてい  
る。

早苗「これでいいかしら」

女子生徒A「はい！」

女子生徒B「きやーかつこいい！ 飯田さん

に勉強教えてもらっちゃった！」

女子生徒たち、うれしそうに離れる。

その様子を見ている千咲、彩夏、里見、

愛梨の4人。

早苗、千咲たちのもとへ歩いてくる。

彩夏「あいかわらず人気だね早苗」

早苗 「そうね。なんでかしら」

彩夏 「女子ウケするからじやない？ 明らかに女子ウケだよこれ。クールな感じがウケてるのかな？」

里見 「なんか、早苗がウケてんのわかるぜ。かつこいいよな早苗。ちよつとちげえけど、早苗見たとき昔の大好きな友達のこと

思い出したし」

愛梨、里見を見て悲しそうな顔をする。

千咲 「そうなの？」

里見 「ああ。お前も……いや、お前は早苗とはぜんぜん似てねえな」

早苗 「そうかしら？ 似てるから映画出演させたんだけど」

里見 「いや雰囲気の話だよおおえ！」

○ 柏木宅・寝室（夜）

千咲、スマホをいじつている。

柏木奈子、千咲の頭をなでなでする。

奈子 「楽しそうね」

千咲「うんっ！ お友達4人もいるから！」

奈子「かわいい！」

千咲「えへへー。もう、柏木家に養子で入っちゃやおうかな？」

奈子「しんどかつたら、そうしてもいいのよ」

千咲「でも……せつかくもらつた名前を捨てたら悪いから」

奈子「優しいね」

奈子、千咲をじつと見つめる。

※ ※ ※

(フラツシユ)

奈子、病院で息を切らしながら、3人の寝ている女の子の赤ちゃんを見る。

※ ※ ※

奈子 M「でも、もう……」

○白石インテリジェンス前

T「数日後」

立て看板に、人間と人工知能の共同フ  
アツシヨンショード開催の旨が書かれて

いる。

里見 「ここか」

里見、建物を見上げてから中に入る。

○白石インテリジエンス・広い会場（朝）

洋風の部屋に、カメラを構えた人などたくさん的人がいる。

里見、椅子に座る。

彩夏 「本日はお忙しい中御足労いただき、ま

ことにありがとうございます」

スーツ姿の彩夏、壇上でイベントの説明をしていく。

壇上に、精巧な人型人工知能が様々なファッショングで立っている。

彩夏 「では、参加者の人間の方はステージまでどうぞ」

控室への出入口から、様々なファッショングに身を包んだ男女が出てくる。その中に、愛梨、早苗、千咲がいる。

千咲、肩と胸が露出している服装に身

を包んでいる。

参加者全員が、番号札を首にかけている。

千咲 M 「なんでこんなことに……」

千咲、恥ずかしそうな表情で胸元を手で隠している。

○（回想）女子高・3の3教室

5人、千咲の席の近くに集まっている。

彩夏 「つてわけで、うちでファッションショージやるの」

里見 「なんでA I企業でファッションショー やんだよおおえ！」

彩夏 「簡単に言えばA Iの性能テストだよ」

早苗 「あたしもなぜか招待されてね」

愛梨 「わたしも……」

里見 「じやあ、あたしと千咲で見に行けばいいんだな？」

彩夏 「ううん、千咲は参加してもらうよ。もう申請したから」

千咲 「……は？」

千咲、きよとんとする。

里見 「まじか。じやあ見に行こうかな」

（回想終わり）

○白石インテリジエンス・広い会場（朝）

千咲 M 「彩夏のばか！ なんで参加させたの！ こんなとこに素人招待するなああああ！ つてか 50 番つて最後じやん！ もあ！」

うう！」

彩夏、笑顔で千咲に向かって手を振る。

千咲、ドキッとする。

千咲 M 「彩夏かっこいい……こんなのドキドキしちやうつてば。これじやわたしが恋してるみたい……つてそんなわけないからっ！」

彩夏 M 「千咲かわいい……ふふ、このイベン  
トに呼んだ甲斐があつたなあ」

彩夏、ほんわかしてから、客席の方を  
向く。

彩夏 「では、それぞれ自分のファッショニについてプレゼンしてもらいます！」

千咲 M 「そんなの聞いてないんだけど…」

彩夏 「では、1番の方からどうぞ」

里見 M 「へえ、人工知能よくできてんな。これあらかじめ言わすこと決めてんのかな？」

千咲 「15番の方、どうぞ」

15番の早苗、前に出る。

早苗 「これは、最近撮影した映画で着たものです。ちなみにわたしは主人公役です」

きりつとした雰囲気の早苗のプレゼンが終わる。

彩夏 「33番の方、どうぞ」

33番の愛梨、前に出る。

千咲 M 「わたしが褒めたやつだ」

愛梨 「これは、モデルの仕事で着てたものです。友達に褒められて、お気に入りなんで

す」

にこにこした愛梨のプレゼンが終わる。

千咲の隣の人のプレゼンが終わる。

彩夏「では、ついに最後！ 50番の方どうぞ！」

少し大きくなつた彩夏の声。

千咲M「わたしの時だけ盛り上げるなあ！」

千咲、前に出る。

千咲「あ、あ、えっと……」

彩夏M「わたしが選んだ肩出しスタイル……

エロすぎ、かわいすぎ、まぶしすぎ」

千咲「あ、あ」

彩夏M「緊張してるね」

彩夏「最後だし、ゆーつくりでいいからね」

彩夏、千咲の肩に触れる。

千咲M「無理無理無理無理！ こ、こんな、  
たぶんみんなの中でいちばん露出してるや

つ着ながらとか！」

千咲「あ、この服、かわいいです……」

千咲M「そんなわけねええええ！ エロいし

かないよ！」

千咲、涙目。

彩夏 「それでは、最後を飾ってくれた50番の女の子に、惜しみない拍手を送つてください！」

千咲M 「ちよ、まだ下がつてないんですけど！」

観客A 「うおおおお！」

観客B 「いいよー！」

観客C 「かわいいーー！」

様々な褒めが千咲に浴びせられる。

千咲、小走りで後ろの列に戻る。

### ○ 同・食堂

会場と同じ構造の広い部屋。さきほどの参加者や観客がバイキング料理を食べている。

千咲 「もう無理脱ぎたい脱ぎたい脱ぎたい」

千咲、部屋の端で縮こまつている。

彩夏 「ほら、せつかくの豪華バイキングなん

だし、いっぱい食べて！ ランキング5位

の50番さん」

千咲「立てないよお……」

彩夏「立てー！」

彩夏、千咲を立たせる。

彩夏「せっかくがんばったんだから。の中  
で5位つてすごいよ？ 食べて。ほら、一  
緒にいてあげるから」

千咲「わかったよおー」

千咲、立ち上がる。

5人組、集まる。

里見「千咲、なんつうか、すげえ服だな。直

視できねえ」

愛梨「でも、かわいいよ」

早苗「さすがエロさだけは一級品ね、千咲。

映画にキヤステイングして正解だつたわ」

千咲「エロくない！」

彩夏「えい」

彩夏、千咲の胸を揉む。

千咲「ひうんつ！ あ、あ、あんつ、無理い

つ、そ、そこ……そこは触るなあつ！」

彩夏の指が千咲の胸の突起に触れる。

千咲 「い、あつ……イクつ！」

千咲、ピクンと震える。

彩夏 M、里見 M、愛梨 M 「エロい……」

早苗 「そんなに喘いで言い訳する気？」

千咲 「も、もう！ 彩夏！ ほんとに怒るよ  
？」

千咲、頬をふくらませる。

彩夏 「はーい」

彩夏、千咲の胸から手を離す。

5人、料理を食べている。

千咲 「おいひい……来てよかつたあ」

千咲、肉を食べている。

彩夏 「肉好き？」

千咲、食器を机に置き、

千咲 「好き！ やつぱ、昼は焼肉つしよおお  
おお！」

思いつきり体をそらす。服がずれ、胸  
が丸見えになる。

彩夏 「あつ」

4人、千咲を隠す。

千咲、服を直して立ち上がる。

千咲 「あつぶなあ……」

彩夏「もうちよつとエロい千咲見てたかった」

千咲 「何言つてんだこの！」

千咲、彩夏の頬をつねる。

彩夏 「いたいたたた」

○大通り

5人、歩いている。

彩夏 「楽しかった？」

千咲 「彩夏のせいで恥ずかしかった！」

千咲、ほっぺをふくらませる。

彩夏、頬を赤らめる。

早苗 「焼肉は夜じやなかつたかしら？」

千咲 「え、早苗ちやん知つてるの？ 意外」

早苗 「ええ、子供のころから見てたから」

千咲、早苗に歩み寄つてくつつく。

千咲 「早苗ちやん！ 女神！」

早苗 「な、何よ。近いわ」

千咲 「友達だしいいでしょ？」

早苗 「はあ⋮⋮好きにすれば」

千咲 「わあい！」

千咲、とびつきりの笑顔になる。

千咲 「ところで彩夏、会社継がないんじやな  
かつたつけ？」

彩夏 「ああ、まだ社長になる時期じやないか  
ら保留中」

千咲 「保留、か」

千咲 M 「いつかわたしも、彩夏の思いにも答  
えを出さなきやいけないんだなあ」

○女子高・3の3教室（朝）

千咲 N 「そして、夏休み直前」

千咲、教室に入る。

彩夏 「あ、千咲！ いま、夏休みの旅行先ど  
うするか話してたの！ 海山で2対2なん  
だけど」

千咲、自分の席に座る。

千咲 「両方は？」

彩夏 「いやー、みんなの事情を合わせるとなんか無理でさー」

千咲 「ふーん。みんなどつち？」

早苗 「山ね、落ち着けるから。勉強はかどりそう」

早苗、きりつとした表情。

彩夏 「海！ 千咲のエロい水着見たい！」

彩夏、千咲の胸を見ている。

里見 「山だ！ 早苗と似たようなもんだ。あと、友達が好きだったから！」

里見、明るい表情。

愛梨 「……」

千咲 「ガリ勉が約2名と変態が約1名……愛

梨ちゃんは？」

千咲、愛梨を見る。愛梨、沈黙。

千咲 「どしたの？」

彩夏 「愛梨ちゃん海だつて」

千咲 「へえ」

千咲、はつとする。

千咲 「海！ 海行きたい！」

彩夏 「そっか。じゃあ、海にけつてーい！」

彩夏、手を挙げる。

早苗 「彩夏をひいきしたわね。まあ、彩夏の希望どおりもまた一興ね」

里見 「あーちっくしょ！ 海だったか！ でもま、海も楽しいよな！ みんなでいけるのが楽しみだ！」

千咲 「愛梨ちゃん、海だよ」

愛梨 「……うん」

愛梨、力なくうなづく。

○ 体育館周辺

千咲、自販機でメロンソーダを買い、飲んでいる最中。

愛梨 「千咲ちゃん」

千咲 「お、やつほー。何か買うの？ よかつ

たらおごるよ？」

愛梨 「同じの……」

千咲、メロンソーダを買う。

千咲 「はい」

千咲、メロンソーダを愛梨に渡す。

愛梨、飲み始める。

愛梨 「さつきのつてさ」

千咲 「うん？」

愛梨 「気遣つたの？」 ほんとうは山行きたか  
つたとか」

千咲 「え？」 別にほんとうに海行きたかった  
んだけど」

愛梨 「そう、なんだ。里見ちゃんは、山行  
きたがつてたから、わたしも、山のほうが、  
よかつたのに……怖いの。山に行きたいつ  
て思つたんだけど、体が、震えちゃつて……  
⋮」

愛梨、泣き出す。

千咲 M 「よけいなことしちやつたかな……山

を希望したほうが」

愛梨 「山に行くと、わたしに生きる価値がな  
いって思つちやうの……」

千咲 M 「ううん、やっぱり、山は愛梨ちゃん

にとつて酷だ。気持ちの整理がつくまでは。

それに、海に行きたかったのは本当だから」

千咲「ああ、気にしないで。学校来るの遅れ

たせいで、実質わたしの独断で決まってた  
から。ほら、そろそろいこつか」

千咲、歩き出そうとする。

愛梨、下を向きながら、千咲の制服の  
すそあたりをつまむ。千咲、止まる。

愛梨「あ、ごめん……もう少し、このままで、

いさせて……」

千咲、悲しみを含んだ笑顔になる。

千咲「いいよ」

愛梨「う……ううつ……」

千咲、愛梨を優しく抱きしめる。

千咲「だいじょうぶ、みんなで海行つて楽し  
もうね。愛梨ちゃんも、いーっぱい、楽し  
んでいいんだから」

千咲、愛梨の頭をなでる。

愛梨「ちさぎぢやああん……」

その様子を少し遠くから眺める里見。

里見 「（小声で）ちつ。山がよかつたんなら  
山選べよおおえ！」

里見、頭をかきながらその場を去る。

里見 「別に海でもいいけどよ……」

歩く里見の背中を見つめる千咲。

○白石インテリジエンス前（朝）

荷物を持った5人、バスの前に集まつ  
ている。

千咲 N 「そして、夏休み」

千咲 「すつごー！ 最新A Iが搭載されたこ  
のバス乗れるの？」

彩夏 「うん」

里見 「貸し切りなんて、すげえな」

早苗 「さすが彩夏ね。ファッショニシヨーで  
使われたA Iが、どこかに搭載でもされて  
いるのかしら？」

彩夏 「まあね」

千咲 「彩夏すごいね！ ほら、みんな行こ！」

千咲、彩夏に笑顔を向け、バスに入る。

彩夏、ドキッとして頬を赤らめる。

早苗「恐ろしいわねこの悪魔…無邪気に笑顔をふりまいて優しくおきながら、内心破廉恥なことばかり考えている。優しさが本心だとしても、恐ろしいわ」

里見「そんな悪魔言われるほどエロかねえだろ」

早苗「里見が知らないだけよ」

里見、自分の胸元を見て、

里見M「またこのちくつとする感覺…」

すぐ視線を戻す。

里見「え？ いや、やったの撮影だけだろ？」

彩夏「いいから、早く乗るよ！」

### ○バス内部（朝）

千咲「たのしー！ ほら愛梨ちゃん、見て！」

千咲と愛梨、隣の席に座っている。その隣に、彩夏。

愛梨「う、うん」

千咲「もー！ はい、お菓子！」

千咲、ポテチの袋を取り出す。

早苗「お昼が食べられなくなるわよ、千咲」

里見 一そ うたそ

千  
咲  
一  
ち  
元  
日  
一

千咲  
むくれる

○旅館前

5人と前田香（30）、旅館の前に立つてゐる。

千咲「やつほー！」 うみー！」

彩夏 「そんなに楽しみだつたの？」

千咲 今まで友達できなかつたから」

夏一そつか  
樂しんでくれてすこく嬉

香  
彩 夏 の も と に 歩 く

采夏二略

彩夏、千咲の頭をなでなでする

千咲  
一  
ん

千咲、頬を赤らめる。

その様子を少し遠くから見る早苗、里見、愛梨。

早苗 「彩夏、猛アタックしてるわね」

里見 「そ、そだな」

愛梨 「うん⋮⋮」

里見 「早苗は彩夏のことなんとも思ってねえのか？」

早苗 「そういう意味では見てないわ。見てたとしても言わないでしようけど。里見、それ聞いて何がしたいの？」

里見 「え？」

早苗 「里見、あなた⋮⋮」

早苗、里見をじっと見つめる。